

写真専門部

2024

— 第27号 —



第48回全国高等学校総合文化祭岐阜大会写真部門 最優秀賞・文部科学大臣賞

「青い夏」 静岡県立磐田南高等学校 3年 福井 南月



公益社団法人全国高等学校文化連盟正会員団体
高等学校文化連盟全国写真専門部

カラフルフォトリンピック

東京工芸大学 芸術学部 写真学科 教授 上田 耕一郎

「カラフルフォトリンピック」という言葉を聞いたことはありますか？カラフルフォトリンピックとは、2024年に東京工芸大学芸術学部開設30周年記念企画として、株式会社華ひらくとの共催でスタートした、全国の高校生を対象としたフォトコンテストです。その記念すべき第1回の募集要項には次のように書かれています。

カラフルフォトリンピックは、写真表現の力を使い、カラフルモデル〔障害のあるキッズモデル〕の魅力を意義を社会に伝える、高校生を対象としたフォトコンテストです。みなさんは日常的に障害のある人と触れ合う機会がありますか。日本はまだ分離教育が主流で、障害のある子とない子が一緒に学べる環境が十分ではありません。小中学校にはあった支援学級も、高校や大学ではなくなり、大人になるにつれて障害のある人との接点が減ってしまいます。でも、今は多様性の時代です。10代の頃から障害の有無を問わず色々な人と触れ合い、「ちがいを」受容できるやさしさを育む機会が大切です。カラフルモデルたちの最大の魅力は、飾らない自然な表情です。みなさんの写真の力で、ありのままである事の素晴らしさを社会に伝えてください。私たちの目指す未来は、障害があっても堂々と生きることができる社会です。この撮影会や展覧会を通して、すべての人がお互いの人権と尊厳を大切に作るインクルーシブ社会を実現させる一助となることを願います。これからの社会を担うみなさんが、カラフルモデルと出会い、撮影を通じて何かを感じ、何を考えたのかが未来に対する大切なメッセージになると思います。写真を愛する高校生の皆さん、ご応募をお待ちしています。

共催の「華ひらく」という会社は、カラフルモデルのマネジメント会社です。「障害があっても堂々と生きられる社会を作りたい」——内木美樹代表は、ご自身のお子さんにも重度の障害があって、様々な経験から日常生活の中で



障害のあるキッズモデルを撮影する
高校生の全国公募展、参加者募集中!

カラフルフォトリンピック 2024.8.22 [Thu] 撮影会開催!
主催：東京工芸大学／華ひらく

健常者と障害者の居場所が、基本的には別々で障害者と社会の接点は、ほとんど無いと感じているそうです。そんな中で障害を持つ子どもたちを「カラフルモデル」と称して、例えば企業広告にカラフルモデルが登場することで、多くの人に障害のことを知ってもらい障害があっても1人の人間であって、社会の一員であるということを証明していきたいと日々考えています。

内木代表のほか3人の運営メンバーを紹介させていただきます。まず、デザイナーで東京工芸大学名誉教授の福島治先生です。福島先生のご専門はソーシャルデザインですが、障害者アートライブラリー「Artbility (アートビリティ)」の活動にも長年携わっていて、障害のある方々の創作活動を継続的に支援されています。高校生×カラフルモデル×写真で、これまで見たことが

ないとても素敵なものが生み出せるのではないかとワクワクしています。それから東京工芸大学写真学科准教授の勝倉峻太先生は、全国各地の高校に出前授業に行くことが多いので、会ったことがある人がいるのではないのでしょうか。そして私、上田は写真学科で肖像写真の研究室を担当しています。色々なご縁があって、この企画のお手伝いをさせて頂いております。

さてカラフルフォトリンピックはフォトコンテストですが、単に作品を募集して賞を決めるではありません。この企画に参加することで、高校生のみなさんに様々なことを学んでほしいという思いがあります。まずは、2024年の6月に参加者の募集を開始しました。高文連全国写真専門部事務局長の梶野先生にご協力頂き、首都圏の高校を中心に案内をさせて頂いた結果、15名の高校生の方にご応募頂き、8月22日に千葉県市川市にある和洋国府台女子中学校旧校舎で撮影会を実施しました。今回の撮影会場ですが、現在は移転して校舎は学校として使用されていないものの、教室やグラウンドなどの施設がそのまま残されてお



撮影会の様子1



撮影会の様子2



撮影会の様子3

り、ドラマや映画の舞台としても利用されている素敵なロケーションです。

当日は朝10時に集合して、段取りなどの説明の後、高校生とカラフルモデルの顔合わせです。いきなり撮影を始めるのではなく、まずは“初めまして”のコミュニケーションタイムとしてグループごとに分かれました。高校生のみなさんは最初こそ緊張の面持ちでしたが、すぐに打ち解けていきました。その後はいよいよ撮影です。朝は悪天候で雷も鳴っていたのですが、徐々に回復し晴天に恵まれました。お昼を挟んで午前と午後、教室や音楽室、中庭やきれいな芝生のグラウンドなど思い思いの場所で、走り回り、たくさんの笑い声が聞こえてきました。実は、撮影にあたってはいくつかのルールがあります。避けてほしい声かけは、「笑って!」「こっち向いて!」「ポーズとって!」。普段私たちが人物を撮る時にはよく使う言葉ではないでしょうか。なぜ?と思われる方もいらっしゃると思いますが、障害を持っているお子さんなので、慣れない場所で怖がる子や、奇声をあげてクルクル回る子、全然目を合わせてくれない子もいます。無理に笑顔をつくる必要はないのです。カッコいいポーズなんてできなくても構いません。カラフルモデルの魅力は「ありのまま」なのです。ありのままの彼・彼女の姿を捉えることこそ、カラフルフォトリンピックの趣旨なのです。「〇〇ちゃん、かわいい!」「〇〇くん、いいね!」。こんな言葉はカラフルモデルの気持ちを盛り上げてくれるかも知れません。撮影者が発する率直な言葉だからです。撮影中に何が起るかは誰にもわかりません。ハプニングも含めて楽しむことが重要なのです。参加した高校生は、みんな本当に楽しそうにカラフルモデルたちと戯れ、一生懸命写真を撮っていました。とても印象的な光景でした。

大きなトラブルもなく、無事撮影の一日を終え参加者は次のステップに入ります。1ヶ月くらいの期間で、撮影した写真の中から3点選んでコンテストに応募して頂きました。写真だけではなく、「撮影会を通じて感じた事や学び、および作品に込めた思い」というテーマで作文を書いて頂き添付してもらいました。そしていよいよ審査に入ります。審査員は田中秀幸氏(日の出写真商会代表・日本写真文化協会会長。営業写真館業界の中心で活躍されています)、葛谷舞子氏(Photostudio-Home代表。本学写真学科在学中にダウン症の少女をテーマに作品制作を行い、現在も写真を通じて障害者支援の活動を続けています)、そして勝倉峻太氏、上田の4名です。応募された写真はどれも素晴



授与式

らしく、また作文も高校生の思いが詰まったものばかりで、期待以上の成果物を前に、この中からどれかを選ばなくてはいけないという難しさとの戦いでした。

11月に、受賞作品が発表された後、12月14日に東京工芸大学で授賞式とセレモニーが執り行われ、大学のギャラリーで入選・入賞作品展がスタートしました。賞は金賞、銀賞、銅賞のほか、審査員賞、協賛企業賞、秀作賞が用意されていて、さらに応募作品は全て入選作品として展示されました。会場では、実に様々なカラフルモデルたちの素顔が広がりました。笑顔の子、何かに夢中になっている子、大泣きしている子……。展示期間は約1週間でしたが、大学の教職員や学生にもたくさん観てもらうことができました。授賞式で驚いたのは、受賞した高校生のスピーチでした。みんな原稿などを見る事なく、しっかり前を見据えて「喜びのこぼれ」を立派に語っていました。本当にこの企画を実施して良かったなと思った瞬間でした。

そして、カラフルフォトリンピックは続きます。これは単発の企画ではなく、次年度以降も毎年開催を予定しています。10年、いや100年続けていきたいと考えております。全国の高校写真部のみなさん(もちろん写真部でない方も)、次のカラフルフォトリンピックに是非ご参加ください!新しい募集要項が出来次第、可能な限り各高等学校へご案内をさせていただきます。また専用のホームページもありますので、チェックして頂ければ幸いです。こちらで受賞作品も閲覧することができます。今後、多くの高校生の皆さんと出会うことを楽しみにしています。



集合写真(受賞者・カラフルモデル・関係者:授与式にて)

カラフルフォトリンピックホームページ

<https://colorful-photolympic.com>

